

講 演

教員の研修とは何か

～「他者をどうするのか」の前に、「自分をどうするのか」を～

日本教育技術学会名誉会長 野口芳宏先生

一．教員の質が教育再生の鍵を握る

思いがけないご縁で皆さまとお会いできて大変光栄に存じております。まあ、立派な建物ですねえ、びっくりしました。絨毯がこんなに厚い所なんて、初めて歩きました(笑)。大変、私は、緊張しておりますが、皆さんはどうぞくつろいだ気持ちでお付き合いいただきたいと思います。と思っております。

話というのは一生懸命聞いていてもよく解らないこともありますし、ポーッと聞いていても後で一つ二つ心に残るものもあります。それはみんな話し手の責任であって、皆さんの責任ではございませんので、どうぞお気軽にお願いいたします。

日本の現在の子どもや若者を巡る状況を「このままでいいだろう」と考えている方はおそらくいないでしょうね。「どうも先行きが気になる」「心配だ」「何とかしなくてはいけない」と、心有る方は、例外なくそうお考えであると思います。私ももちろんそう考えております。

昨年九月に発足した安部内閣は政府の最重要課題に「教育の再生」を掲げています。これは大変楽しみでございます。しかし、再生という言葉が辞書で引きますと、「死にかけた者が生き返る」(笑)と、(広辞苑)に出ております。

私共も、このままではいけないということで、民間の教育運動を始めようと、仲間とNPOを立ち上げるべく今準備をしております。原案は「再生」という言葉でしたが、死にかけた者が息を吹き返すというのではどうもあまりよくないので、私が反対の発言をして「再び起こす」という意味から「日本教育再興連盟」としました。今、認可申請中でありまして、これが認可されますと、きちんとその名前を使って新

しい運動ができるので、この活動もまた楽しみにしているところであり
ます。

さて、政府の最重要課題として掲げた「教育再生」について、先日
の安部総理の挨拶の中に、「教員の質が教育再生の鍵を握っています」
という言葉がありました。この総理の言葉に私は大変こだわるし、ま
た誇りをもちます。

今、教育基本法の改正を受けて「家庭教育が何よりも大切だ」とい
う方向に世の中の考え方が動いております。改正された教育基本法に
も家庭教育という言葉が盛り込まれました。今までは無かった項目で
す。

ところで皆さん、教育の場は大きく三つに分かれます。一つが家庭
教育、二つ目が学校教育、そして三つ目が社会教育です。これは成長
順になっています。まずは、学校に入る前は家庭ですよね、それから
学校にあがる、学校を卒業すると社会に仲間入りする、だから教育は
この三つの場で行われているんです。そして、この三つがきちんと機
能していないから現在のような状態になっているのです。けれども、
あえてその中のこれが一番問題なんだというところを一つ挙げるとす
れば、皆さんは、それは家庭だと思えますか？ 学校だと思えますか？
社会だと思えますか？ 左の手のひらに家庭だと思ったら「家」、学校
だと思ったら「学」、社会だと思ったら「社」と書いてみてください。

私の方を見ていないで、掌に書いてみてください(笑)。手のひらに
「書く」ということは、頭の中の考えに形を与えることです。形を与
えたと眼に見えます。見ると検討を始めます。自分の考えがどのよ
うな形を持っているか、ということを手のひらにイメージ化するわけ
です。これは授業でも非常に大事な技術であります。優等生の皆さん
は左の手のひらに書いてみてください。別に書くと言ってもボールペ
ンで本気になって書かなくてもいいですよ。指先で書けばいいんです。
この間はマジックで掌に書いた方がいました(笑)。これから、まだ書
いてもらうことがいくつもありますので、一字で使えなくなるよう
に、指先でお願いいたします。

次に、先生方は必ずこのように聞きますね。だいたい「はい、書け
た人？」とか「出来た人？」と聞きます。でもそうすると書けた人、

出来た人が手を挙げて、手を挙げない子はそこで見捨てられるんです。そして頭の良い子ばかりを相手に授業が進んでしまうんですね。そのような子が大きくなって体力をつけてくると「お礼詣り」に来ますね（笑）。これが怖いんです。だから私は反対に「まだ書かない人、いますか？」と必ず聞くことにしています。つまり、いつでも全員を必ず教師の視野の中に入れる、一人も落ちこぼさない、という方法です。

では、「まだの方は」というと手が挙がりません。おそらく法華経の信者で、お釈迦さまのお弟子である皆さんが嘘をつくとは思いません。けれども、書いてないくせに手を挙げない人が世の中にはいます。そこで、両隣の方が何処で手を挙げるか、お互いに善意の監視をしあっていたらいいと思います（笑）。

その前にどこに多くの手が挙がるか、ちょっと予想してみたいと思います。では、格別の意図はありませんけれども、私が立ち止まった所で指名させていただきます。ご自分が何を書いたのか、ではなく、どれが多いと思うか、という質問です。

そこの赤い服の方、「家だと思えます」。家庭教育ですね。ではこちらの方、「家です」。そちらの方は、「家」。こうなると、今、掌に「社会」と書いた方はまずかったかな、という不安が掠めているのではないのでしょうか。（笑）

あなたは、「家庭です」。こちらのあなたは、「家庭」。このように予想しますと、さて本当はどうなんだろうか？ということが楽しみになってくるわけですね。このようにいつも予想させてから結果を言わせる方が子どもの身になるんです。

では、いよいよ手を挙げていただきますが、大方の大人は手を挙げるのが下手です。ちょっとやってみますが、きっと下手な人がいると思いますよ（笑）。では手を挙げていただきます。家庭の「家」と書いた方？ あー、かなり手の挙げ方がいいですね。ちょっと手を振ってみてください。断然、多いですね。たぶんこの大方は学校の先生方でしょうね。「学」と書いた方は？ はい、二十四人ですね（笑）。

はい、では次は、社会の「社」。あっ、この方がちょっと多いですね。五人ぐらい多いですね。はい、もう一度確認しますが、一度も手を挙げなかった人は嘘をついていますよ、法輪閣ですよ、ここは（笑）。

ハイ、もう一度、家庭！ ちょっと手を振ってください。圧倒的に多いですね、学校！ 手を振ってください。社会！ 振ってください。ありがとうございます。

これは何処で聞いても大体同じ結果が出ます。しかし、私は皆さんのようには思いません。「家庭教育」というのは非常に難しいからです。肉親同士ですから、朝うまくいかないと一日中後を引くんです。私は家に帰ると爺さんの立場です。まもなく私は満七十一歳です。二月産まれですから、今はまだ満七十歳です。

家には小学生と高校生の孫がいるんですが、教育者である爺さんから見ると、いろいろとご注意申し上げたいことがあるんです(笑)。ところが、それを正直に実行すると、どうも雰囲気冷えるし、とんでもないことになれば、老後が危うくなるわけです(笑)。私の老後が不安になるわけですから、言おうかなと思っても、「マァー、マァー、しょうがないか」となりがちです。家庭教育ってそういうものじゃないですか、実際のところは。

だから、「先生、家では親の私の言うことは聞かないから、先生から話してください」としばしば言われるのです。私も学校の教員生活が長かったので、よくそう言われました。

家でも直せない者が他人の私に直せるのかなあ、と腹の中で若僧の私は思っていましたけれど、今にして、私は家庭教育というものの難しさを思います。家庭には教科書もありませんし、教頭も校長もおりませんし、教育計画もありません。そして、家族は家庭教育の特別の資格もありません。みんな素人なのです。親になったばかりだし、二人目の子どもを産んだところで、二人目の子どもを産んだのは初めてです。つまり、親は子どもの教育については、みんないつでも素人なのです。

ところが、学校は教育の専門機関です。教育のプロがきちんとした教育計画と教科書で教えます。そして、学校は土地から建物から運動場から、この頃はコンピュータまで揃えてもらっています。学校は教育のメッカなのです。

そこでやっている教育が不十分だから、ろくな大人にならないのでしょう。ろくな大人にならない者が家庭を持つから、ろくな家庭が出

来ないのです。その家庭を直そうとして、「家庭教育の勉強会をやるから集まってください」と言っても、集まってくる人たちの実態は、教育を受けなくても良いほど立派な人たちだけです。本当に勉強会に来てもらいたいような人たちはパチンコ屋さんの方に行ってしまうと、学校の方には来ない、というのが正直な現実じゃないですか？

私は、現実主義者です。事実・現実を目を向けて、そこから物事を考えていかなくちゃいけない、といつも思っています。家庭教育を良くしようとするのは、実際は、非常に難しいことです。日本の教育、あるいは日本の社会、日本の国家を良くしていく一番の近道は、学校教育の正常化です。学校がきちっとした教育をすれば、二十年後の国家と社会は変わります。だから、学校教育の正常化が一番早道なのです。

安部総理は、「教員の質が教育再生の鍵を握る」と言いました。そして、教育再生は、「内閣の最重要課題だ」と言っています。政府の最重要課題を具体的に推進していくのは先生方、私たち、あなた方なのです。

二．教育が成立する条件

私もそれを担ってきた一人ですが、戦後の学校教育というのは、様々な問題をはらみながら、六十年に渡って大きな過ちも犯してきたのではないかと、思っております。もし、その時代の学校教育がまともだったなら、こういう社会にはならなかった、と思うのです。

社会を正す。国家を改める。それには学校教育が根幹です。家庭教育というのは学校教育の結果であります。だから、良き家庭人になるということを視野に入れた学校教育の日常的充実ということが一番肝腎であります。

そこで、第二問です。

ここには学校の先生がかなりいらっしゃいます。保育園の先生も、幼稚園の先生もいらっしゃいますが、皆さん大方が先生です。どうでしょう、「学校の先生方は怠けてるのだ。努力が足りないからこうなったんだ」と思う方は手のひらに を、「そんなことないよ、先生方は一

生懸命やってるよ」と思う方は×を書いてください。「努力が足りないんだ」と思うか、「いやいや先生の努力は限界にきている」と思うかです。

まだ、も×もつけてない方？手を挙げてください。(挙手なし)だんだん勉強の仕方に慣れて来ましたね(笑)。これはどちらが多くなるのでしょうか。

ではあなたは？「×です」。はいこちらは？「×」。はい？「×です」。

このへんでやめておきましょう。先生方は怠けていない、という方が多いのではないかと三人の方が予測されました。では、事実はどうでしょうか。先生方の努力不足だ、と書かれた方？(ごく少数)ちょっと手を挙げて振ってみてください。ありがとうございます。×を書かれた方も、ちょっと振りましょう。(圧倒的多数)

私は三十八年間、定年まで小学校だけで過ごした人間ですからよく分かります。職場を共にしてきた何処の学校の先生仲間を振り返ってみても「あいつ怠けてるなー」というような印象はほとんど持たずにきました。私は今、日本の教師の大方は、これ以上頑張れば体を壊すか、家庭を壊すか、頭を壊すか(笑)いずれかだと思っています。この頃の先生方の中には、頭を壊して入院している人が五万人を超えているという事です。もう限界です。とすると、そんなに先生方が本気になってやってもどうも結果が思わしくない、ということは、何かやり方が違うのではないかと、何処かが違っているのではないかと、ということになります。

「教育は人である」と、昔から言われています。そうです。教える教師の力、一言で言えば教師の力が一番大切なのです。政府も文部科学省もなんとかして先生方の力をつけよう、といろいろな政策を施しております。

ところで、「教育公務員特例法」という法律があります。これは、一般公務員と教育公務員の間には、ちょっと一線を引こうじゃないかという法律です。「特例法」と言っても、教員にだけ該当する法律であります。「教特法」とも言っております。その第二十一条に「研修」ということが書かれております。どのような条文が書かれているかと申しま

すと、これが凄い文章です。

「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と書いてあります。この二つの言葉、研究と修養の頭をとって「研修」という言葉が日本で作られたのです。この言葉は漢字で出来ている二次熟語ですが、漢和辞典には載っていません。日本語の略語だからです。

私たち教員は、「研究」という言葉はいつでも耳にしますね。国語研究会、社会科研究会、健康開発研究会、福祉教育研究会など、歯の健康研究会、給食研究会、もう全部が「研究会」ばかりです。いっぱいありすぎて耳にタコが出来て、更にその上にタコが出来るくらいにあります（笑）。けれども、「修養」という言葉は聞いたことがないのです。給食修養会などという名前や社会科修養会などという言葉は聞いたこともないでしょう。「修養」は全く無視されています。だから、日本中の学校が法律違反をしているのです。だって「絶えず研究と修養に努めなければいけない」と書いてあるのに、「研究」しかなないのでから。

言うならば、「ご飯とおかずをバランスよく食べるんですよ」と言っているのに、「おかず」しか食べないのと同じことです。だから別の言い方をすると、学校の先生というのは「研究が大好き」で、「修養が大嫌い」ということにもなるのです。一体、何故、「研究は好きで、修養は嫌い」なのでしょう？

本来は、両方をきちっとやっていかなければいけないのです。ところが、片方は全くしていない。そこで、私は考えてみました。そして、一つの仮説から結論にいたる自分の考えがまとまりました。それは、こうです。

学校がやっている「研究の実態」とは何でしょうか。例えば、読書教育研究会、というのは何をやっているのでしょうか。それは、子どもの読書力を高める勉強なんですね。作文教育研究会というの、子どもの作文力を高める研究会なのです。私はこれを、「他者改善」と言っています。自分以外の人を高めることが先生方は好きなのです。「夏休みがくるよ、夏休みは読書をするのに一番良い時期だ。木陰での読書なんていいよ。少なくとも四冊以上は読もうね。その本の中から一

冊を選んで読書感想文を書いてね」と、日本中の教師がみんな言っています。そこである子が「先生、夏休みに先生はどんなご本をお読みになるんですか？」と質問をしますと、「余分なことを考えるんじゃないの、あなた方たちの読書が大切なんだから」(笑)と、言います。立正佼成会の先生方は別ですよ(笑)。ここにいない先生のことを言っているのですから(笑)。

「夏休みは、とにかく生活が不規則になるから、早寝、早起き、朝ご飯をきちんと守りましょうね」と先生は言います。

「先生、先生は何時に起きるの？」と、生徒が聞いたらどうなるでしょうか。

「そういう質問するものではありません。あなた方のことが大事なんです」(笑)。

つまり、教員というのは自分が出来もしないことも上手に教育できるんですね。しかし、いつかは、それは見抜かれます。先生というのは自分にも出来ない難しいことを口先だけで言っているんだ、と。そう見抜かれたら、その先生の言うことはもはや子どもの耳には届かないでしょう。私は、教育というものが成立するのには、少なくとも三つの要素が必要だと考えて、ようやくたどり着いた考えがあります。

信

第一は「信」です。信ずる人の言葉には誰でも耳を傾けます。不信感を持っている人の言葉に誰が耳を傾けるでしょうか。ですから、子どもと教師の間に信頼感が成立しているか、親と先生との間に信頼感があるか、ということが教育の第一の条件なのです。

敬

これは「尊敬出来る」ということです。あの先生は、僕らに教えることの何倍も勉強している。その一部を僕らに教えてくれているのだ。本当はたくさんを知っているのにその一部分を少しずつ出してくれているんだ。「あの先生は凄い先生だ」と、尊敬したときに私たちはその人の言葉に耳を傾けるのです。尊敬の反対は「軽蔑」です。軽蔑している先生の話に誰が耳を傾けるでしょうか。「あの先生は口ばっ

かりでどうせ当てにならない。三日もすれば忘れちゃうよ。今年の担任はハズレだ！」(笑)そういう中では教育は成立しません。

しかし、信じましょう。尊敬しましょう。だけど、あの冷たさはやりきれない。あの先生は偉いには違いない。非のうちどころのない先生かもしれないけれど、何だかあの先生のところには行く気にならない。これを「敬遠」と言います。敬して遠ざかる。それでは教育はやはり成立しないのです。

慕

そこで、もう一つ大事なのが、「慕わしい」ということです。あの先生の声を聞きたい。あの先生の顔を見ると元気が出る。あの先生に相談してみようかな、という思いです。ですから信・敬・慕、この三つのどれが欠けても、教育は成立しないと私は思うのです。

信・敬・慕の三つが必須の条件であります。この「と」がこの頃特に衰弱しているのです。教育界は、信敬(神経)衰弱なのです(笑)。日本中の学校で信敬衰弱が広まっているのです。神経が衰弱しているところには「慕」も生まれにくいのです。

ところで、信じられ、敬せられ、慕われるようになるには「研究」が大事なのでしょうか？ それとも「修養」が大事なのでしょうか？ どなたか思わず今、答えてくださいましたけれど、そうなんです。つまり「自己改善」そこが肝要なのです。己の不足を常に意識しながら、もっと学ぼうとする。常に自己改善に努める先生は、信じられ、敬せられ、そして慕われるのです。

でも、今、学校は忙し過ぎて、他者改善だけで疲れ果て、とても自己改善をしているゆとりがない、と言う人があるかもしれません。ということは、自分のレベルは昔のまんまで、子どもだけ、レベルをあげようと思っているわけです。これではなかなか教育はうまくいかないでしょう。

日本の教育をレベルアップしていくためには、教師自身が、まず己を人間として高める努力を取り戻すこと以外に無いのではないかと私は考えています。学校の先生方を対象とした現在の勉強会というのは、ほとんど例外なく「他者改善」がテーマです。私もあちらこちら

の先生方との繋がりがあって、「野口先生、来てください」と呼ばれます。「子どもの作文力を高めるためにはどうしたらいいですか？」「子どもの話す力を高めるにはどうしたらいいのでしょうか？」と求められます。みんな「子どもをどうするか」という関心ばかりです。

私はあるときから、これじゃ駄目だ、と思いました。こういう目の先の要求にいくら応えても日本の教育は良くなる。修養、自己改善、ここを一駒か二駒入れないと本当の教育のレベルアップにはならない、ということに気付きました。私は「授業道場野口塾」という勉強会を開いています。全国のいろいろなところで開かれています。その中には「教養講座」という一駒を入れています。子どものことをしばし忘れよう。そして、一駒ぐらいは、我々自身が人間としてどう向上していくか、というテーマの勉強をしよう。必ず修養講座を一駒入れるようにしています。これは珍しい内容なので、わりあい評判が良いようです。

また、私と勉強をしようと思って集まってくるような先生方は、大方、私の考えに似ているわけですから「そうだ、そうだ」と言ってくれるわけですね。仏教の話をする。キリスト教の話もする。先生方は、このような話はほとんど聞いたことがないのです。教員生活を長く続けていても、自分を高める勉強会に出合ったことがないからです。いつも、子どもをどうするかということばかりを考えているのが現実です。

そのようなことに気が付き、だから野口先生の講座は面白い、ということで、わりあいファンが多いのです。私は私の宣伝をするのではありません。教師がそういう大切なことに目覚めて、教師自身の修養という法令通りの実践をしていく必要があると思っています。政府の再生会議の話合いでも、残念ながら、こういう話は全然出てこないようです。

私と親しい方もメンバーにいますので、「修養」ということを再生会議で強く叫んでくれ、と言おうと思っています。子どもの誰よりも先生は勉強している。このクラスの誰よりも、先生が一番本を読み、先生が一番物を深く考え、先生が一番努力をしている、とそう思われたときに、子どもたちはその先生を誇りに思うのです。

「私たちのクラスの先生はそこいらの先生とは違う。そういう先生に私たちは教わってるんだ」と誇りに思います。そのようになったときに初めて教育が実をあげることになるのです。ところが、戦後六十年、教師の世界では、「修養」ということは全く視野から外して「他者改善」にばかり励んできました。他者改善をする本人そのもののレベルが高くないのですから、これではどうも良い結果は出ない。限界だ、というところまでどの教師も目の先の努力はしているんですが、自分を高めるという問題については残念ながら努力不足です。

今日は、立正佼成会の教育者の皆さんが集まっています。皆さんは実は珍しい先生方であります。今日は、「自分自身を高める」ということのために集まっていますね。子どもをどうするというではありません。しかし、自分を高めることが、結果として子どもに良く影響していくことは間違いありません。自分の人生をもっと充実させる、自分の人生をより高いものにしていく。そのために皆さんはここにいらっしゃるのです。そのような先生に教わる子どもさんたちは絶対に幸せであります。

さてそこで、「分かった。修養が大切だということはよく分かった。でも、修養って一体どのように進めていけばいいんだろう」という思いが湧いていると思います。後半ではそれをお話していこうと思います。

三．教師の修養とは

本を読む

まずは、本ですね。若者の活字離れということが言われて久しいです。テレビというものが出てきてから、やはり私たちは本を読まなくなりましたね。それからインターネットが出てきて、また本を読まなくなりました。しかし、活字を読むということは大変に高等な作業なのです。

今、皆さんのお手元にはいろいろな印刷物があると思いますが、印刷物というのは、白い紙に黒い小さな染みが連続しているだけなんです。それだけなんです。文字が繋がっているだけの印刷物を見て、う

なずいたり、笑い出したり、グッと胸に込み上げてくるものを感じたりするのです。

これは、人間にしか出来ない高等な心的作用です。犬が新聞を読むなんてことはありません。どんなに教育をしたって無駄です。字が読めるようになるのは人間だけなんですから。だから、印刷術が無かった頃には、借りて写して本を読んだんです。二ノ宮金次郎なんてそうして学んだんですよ。

その、人間にしか出来ない文化的行為というものが、だんだん暮らしの中から離れていっています。音も出れば色も出る、画面の中で人物が泣いたり笑ったりする、というテレビは、ポーッと見ていても、全部向こう側が視聴者を楽しませてくれるわけです。

だから、テレビばかりを見てると、馬鹿になりますね。活字を読んで涙を流したり、笑ったりする人は人間回復をしているんです。子どもが本を読まなくなった、などと言うけれど、先生もやっぱり本を読まなくなっているんです。後ろに私の本がいっぱいありますが、あまり売れません。明治図書出版というのは、日本で最大の教育書の専門出版社です。講談社とか小学館とかの大手総合出版社は、つまらない本も売って儲けながら、教育書も出しているんです。しかし、明治図書はくだらない本は一切出していません。売れない本を専門に作ってきました(笑)。私の本はほとんど明治図書からの刊行です。こここのころ売れゆきが落ちているのは、先生方が教育書を読まなくなってきたからです。

こういう風潮の中でも、先生が本を読んでいる、ということは素晴らしいことです。ですから、先生は毎日本を読む、本を読まない日はない、というのが望ましいのです。「この間こういう本を読んだよ」と子どもたちに言うと、子どもたちはそれをちゃんと聞いている。「ああ、そういうものか、じゃあ、俺も読んでみようか」となるのです。ところが、全然本を読んだことのない先生が「読書ほど大事なものはないのよ」などと言っても、言葉に力が入らないのです。

読書では忘れられない思い出があります。私は国語教師でしたから本を読むのは大好きです。今日も鞆の中には二、三冊の本が入っています。私が本を読まないという日は一日たりともないでしょう。トイ

レの中と、枕もとにはいつでも本があります。昼間は忙しくて読んで
いられないんですが、電車やバスの中では読みます。寸暇を惜しんで
する、という読書です。机に座って読む、などというのは現実的には
出来ないですね。しかし、読書は昔から好きですから、今でも私は読
書を欠かしたことがありません。

教員になってから、私は大変尊敬するお医者さんと出会いました。
この先生は私の生涯の師匠になりました。この先生が無類の読書家で
した。その先生に「この本は面白かった」と言われると、どうしても
それが読みたくなる。そこで「先生貸していただけますか？」という
と、喜んで貸してくださるんです。この借りる本が貴重なんです。そ
れは、先生が感心されたところに線が引いてあるからです。

線が引いてある本というのはめったに売っていません(笑)。しかも
尊敬する先生が線を引いた本ですから、これは貴重です。読みながら
私は、何故、先生はここに線を引いたのか、と考えます。すると、先
生と話をしながら読んでいるような気がするんです。だから私は、そ
の先生のお陰で多様な本にずいぶんと出会いました。この先生は系統
的に本を読むなんてことは全くなさいません。読みたくなった本を読
むのです。そして、その読んだ本が次の本を決めてくれるのです。つ
まり、乱読です。そのかわり、いろいろな物を多様に読んでおいでで
した。その中でとびきり良いものを私に奨めてくださるのです。

イギリスの生理学者でフレミングというノーベル賞を受けた方がい
ます。その頃、先生は伝記物を読むのを大変喜んでおられました。「世
の中には偉い人がいるもんだ」と言われながら、ベートーベンやゴッ
ホなどを読んでいる中に、フレミングという人の伝記を読まれ、私に、
「これは凄い！」とおっしゃったんです。私はフレミングなんて人の
名まえは聞いたことがなかったんですが、先生が奨めてくださるのだ
から、と借りて読みました。

借りたら、ちっとも面白くないんです(笑)。読み進む気がしない。
「何で先生はこんな本が面白いんだろうか？」と思いました。途中か
らは、線を引いてあるところだけを読んでいきました。ところが、そ
の中に二本線が引いてあるところがあったんです。

どういうところかと言うと、こんなところですよ。フレミングという

生理学者はペニシリンを発見した人です。アオカビの中に細菌を食べていく種類の菌があるのを発見しました。今の世の中にはペニシリンを知らない人はいないだろうけれど、その研究をフレミングは自分のところで行ないました。ほぼ間違いないと胸を張って学会に発表出来る、というときになって、フレミングは自分の研究所へ恩師を招いて来るんです。

大学にエレベーターなんてある時代ではありません。恩師は大変な高齢の方です。階段を上ってこられました。「どれどれお前がやった研究はどんなものじゃ」と言われながら、階段を上って来られた途中で、案内していたフレミングがぱっと身を隠したんです。フレミングがいなくなってしまったので恩師は、キョロキョロ研究所の中を探します。ヨボヨボとしながら、「何処へ行ってしまったんだ、あいつは！」と思ったときに、フレミングが「ワッ！」と言っていきなり現われるのです。恩師は、驚いて「ワァー」と叫ぶ。その姿を面白がってフレミングは手を叩く、と書かれているんです。そこに私の先生は線を引かれているんです(笑)。しかも二本線です。いよいよ先生も頭がいかれたのか、と思いました(笑)。こんなところに線を引くなんて、いくら考えても頭がいかれたとしか思えないんですよ。

お返しにあがったときに、「先生、この本は私にはあまり面白くありませんでした。それに、一箇所どうしても解らないところがあります。先生が二本線を引いたところがありました。何故あんなバカバカしいところに先生は線を引かれたんでしょうか？」

「えっ何処だ、どこだ？」

「ここです」と言いますと、先生は次のように言われました。

「そこには凄いことが書いてある。私は、かねてから天才というものは子どもらしさ、無邪気な稚気を捨てなかった人だ、と思っていた」

「俗な大人は大人になるにつれて大事な子どもらしさというものを捨てていく」。子どもじゃあるまいし、子ども騙しにはあわないぞ、みたいな感じですね。でも本当の天才というのは、素晴らしい子どもらしさというものを最後まで失わないで成長していった人だ、という仮説を先生は持たれていたというのです。そして、フレミングの伝記を読んだ時に、それが見事に証明された、と言われたのです。「ほらやっぱ

り！」ということで、そこに線を引いた、と先生は言われたのです。

私はもう笑いませんでした。本というのはそうやって読むものなのか！ 自分の高い関心が前提にあって、そのことに対して作者は、あるいは筆者はどう応えてくるのだろうか。そういう関心を持って読んでみると、本の方からパッと応えてくれるというのです。

私は国語の教員ですから、要点に線を引くとかという智恵だけでした(笑)。そういう読み方がいかに馬鹿ばかしく幼稚なものであったか、ということに気が付きました。その時から、私は本の読み方が変わりましたね。つまり、筆者に負けないで読む、俺に解からない本は向うが悪い！ だって、こちらは金を払って買って読んでいますからね。だから、自分のためになる本を読むべきなのです。他の人には解らない本でも、私にとってはこの本は価値があるのだ、という場合もあるわけですね。主体的な本の読み方をしなければいけないのだ、とその時に学びました。

それからの私は、読書が気楽になりました。それまでは、一応、国語教育の専門家ですから、これぐらいのものは読んでおかななくては行けないという気持ちで、外向きに自慢するためにも読んでいた。そういう外向けの読書がいかにくだらないか、己のためには今何をこそ読むべきなのか！ と読書の真の意味を知って読むようになりました。それからは読書が楽しくなりました。わけの解らないところは飛ばして読みますから。

そして、本というものは時代を超え、国を超え、もうとうにこの世にいない人たちが言われたということだって、平成のこの時代にも読めるんですからね。本というものは凄い文化です。私は活字をたどって心を躍らせるというのが好きなので、テレビというのはまず見たことがありません。

ニュースは見ますよ。七時のニュースは努めて見ます。後は大河ドラマであろうと、朝ドラであろうと見る暇がないという事情もありますが、見る時間があってもまず見ませんね。活字を読んで頭に描く方がずっと面白いからです。テレビばかり見ている子は、想像力が乏しいです。ゲームやテレビばかりを見ている子は脳があんまり動いてないと言われていました。

この頃はドリルだの、書き取りの本がかなり売れているようです。教育書を読んだら脳が活性化する、という学説が出ればいいのですがね（笑）。

学ぶ

さて、二つ目の話です。それは「学ぶ」ということです。

他者改善には熱心だが、自己改善はしない、というのが今の日本の教師の通有性だ、と先ほど言いましたが、「学ぶ」というのは非常に大切なことではないでしょうか？

「進みつつある教師のみ人を教える権利あり」これは、私が新卒のころ、来賓の方が祝辞として述べられた言葉であります。ジェステルリッヒという学者の言葉だそうですが、玉川大学の創設者小原國芳先生がよく引用してお話されていました。嬉しかったですね、この言葉に出会って。私はこの言葉をいつも忘れまい、と努めて今日にいたりました。

「研究と修養」という言葉の、「修養」という部分はまさにこの一点です。教える立場の教師こそが「学び続ける」んだぞ、という一点です。ところが、小学校の先生なんてのは、二、三年もやればあとは易しいですよ。教える内容はたいしたことはないんです。十三＋八はいくつだ？　なんてのは、骨が折れるほど難しいことではないんです（笑）。だから教師はともするといい気になりやすいのです。

「教師は、持ち前の知識でその日その日を暮らすことが出来る危険な職業です」これは、大村はま先生の言葉です。大村先生は最後まで学び続けました。九十四歳でも講演をされていました。私はその年齢になるまでにはまだ二十四年もあります。とてもそこまでできる望みはありません（笑）。

この頃、指導力不足教員が全国で五百人も指定され、勉強の仕直しになりました。教員採用試験に受かったときが最高のレベルで、そのあとはだんだんと力が下がっていったから、しまいには指導力不足になったんです。試験に受かったときの力が最低で、それから勉強を続けていけば凄い教師になるのに、何しろ自分が完成していると過信、錯覚しているのですから、後は天狗になってしまうんです。

私は、小学校の教員を三十八年間続けて来ました。退職すると同時に、引き続いて北海道の函館に、大学の国語教師として呼ばれました。その当時の前任の国語教師が急死され、補充教員は六十歳以上、六十五歳までという非常に厳密な条件でした。あまり若いのが来て教授になると、次の助教授が中々教授になれません。だから、当座は来て欲しいけれど、早く止めても貰いたいという訳です(笑)。そこで、千葉県に野口というちょうどいい年齢のがいるということになって、私が行かせていただきました。

大学に勤めて発見したことが二つあります。一つは大学の先生は、土曜日でも日曜日でも、大学に行かなくていい日でも、大学に顔を出すということです。夜の十時でも十一時でも十二時でも研究室に明かりが付いている所がいっぱいあります。これは、大学の先生というのは教員であると同時に研究者でもありますから、自分のやりたいことがあると土曜でも日曜でも夜中でもやるということです。その代わりに出勤しなくてはいけない日でも来ないときがあります(笑)。大学というのはかなり自由なところですよ。

でも、命令されてやっているのではなく、自分の考えで勤務しているというところは小学校の先生とは大きく違う立派なところですよ。小学校や中学の先生は土曜や日曜はお休みです。命令されなければ、必要がなければ学校には行きませんね。大学は自分の考えで研究をするところです。ですから、五十歳ぐらいになってから博士号を取るなんて人が結構います。大方が「進み続ける教師」なのです。

もう一つの違いは、自分自分の師匠を持っているということです。大学の先生は必ずその先生を持っています。漢文学の先生は漢文学のさらに偉い先生を師に持っていらっしゃるし、その先生にもさらにその上の先生がいらっしゃるんです。先生をみんな持っておいでです。これを「学統」とか「師系」と申します。ところが小学校の先生は自分が先生なんです。私が学ぶ人はあの人だというような、師匠を持っている先生方はほとんどいないですね。

小学校や中学校の先生は教えることが専門です。それを「教師」と言います。学び続けることを専門にする人を「学者」と言うのです。では、教師と学者という言葉は、社会的にどちらの方が地位が高いか、

と言いますと、「学者」の方が高いのです。学ぶ者の方が尊敬されるんですね。学ぶことを止めて、教えることを専門にしている人は軽んじられ、「先生と言われるほどの馬鹿じゃなし」などと揶揄されるのです。「学び続ける」ということが非常に大切なことです。

観を磨く

第三は、「観」を磨くということです。「観」というのは見方、捉らえ方、感じ方です。人生をどう考えるかを人生観と言います。結婚というものをどう考えるかを、結婚観と言います。教育というのとは何かというのを教育観と言います。「観を磨く」というのは、見方を高め、深めていくということです。

見方というのは本当に面白いものでありまして、コップを真横から見ると、台形に見える。上から見ると丸に見える。見方によってまるで違うんです。「観を磨く」ということは、どういう見方をするかということです。クラスの中に大変てこずらせる子どもがいる、「あいつさえいなければ、助かるのにな」という観もあります。あの子に出会ったのは神さまが私に一つの試練を与えてくださったのだ、あの子のお陰で私は、教育とは何かということ深く考えさせられた。これらは、同じ境遇にありながらも受け止め方が違うということでもあります。悲しく見るのが「悲観」、楽しく見るのが「楽観」、同じ現象でも見方によっていろいろになりますね。

私は田舎の長男坊です。田舎の長男坊は好きな女性と結婚するのはちょっと無理ですよ。次男、三男はいいんです。田舎の私の家には山もあれば、田んぼもあれば、畑もあるしね、それ捨てて好きな女性と一緒にいるなんて、そういうことはやっちゃいけないんです。私の家に来てくれる人を貰うのです。来てくれない人では駄目なんです。その事実を悲しいことと思うか、それが私の恵まれた境遇だと思うか、そこが肝心の「観」であります。

ここだけの話ですが、私だって結婚適齢期を迎えたことがあるんですよ（笑）。だから嫁さんの候補はいましたよ。ところがね、決まりそうだなと思っていても大体駄目になっちゃう。それは何故かということ、私が十歳のときに私の母が亡くなりました。四年生の時です。それが

ら百日経たないうちに継母が来てくれました。この継母のお陰で私の今日はあるのですが、その継母が来てくれてから私の父は大変元気を出して、下に七人もの子どもができました。下宿から家に帰るたびに新しい弟や妹が生まれていました（笑）。

私が結婚して子どもができた時には、何処からが私の子どもだか兄弟だか、他の人にはよく解らなかつたです（笑）。その頃は結婚の条件として、「カー付き、婆抜き、昼寝付き」という言葉が世の中を風靡していました。小姑というのは嫁さんにとってははいない方がいいんです。「小姑一人は鬼千匹」と申します。そうすると、我が家には七千匹の鬼が居たということです（笑）。

だから、いよいよ本決まりというところになると話が駄目になっていました。誤解があつてはいけないので申しますが、私がモテなかつたわけではないんですよ（笑）。私はモテたんだけど、家庭環境に問題があつた（笑）。それで私はもう諦めました。

そんな折に、私は千葉大学の附属小学校に転勤することになったのです。附属というのは都にありますから、家庭環境はバレないだろうと思ひましたね。そこで、「野口さん、お嫁さんの世話をするよ」という先輩の奨めに従がつて、二月二十九日という不思議な日にお見合いをすることになったんです。

ところがお見合いの十日ぐらい前に、何処でバレたのか、相手が断りの電話をして来ました。そこで間に立った先輩が慌てて、「野口さん、申し訳ない」と言つて来られました。でも私はそういうことはもう慣れていいますから「先生、心配ないです。いいですよ」と言ひました。でもあまりにも申し訳ないと思われたのでしょうか、その先生は、「別にこういう人がいるんだけど？」と言われました。「いや、先生、猫の子を貰うわけじゃないんです。三毛猫は逃げちゃつたけど黒が残っている（笑）という訳にはいかないですよ。私はもういいですよ、お断りします」と言ひました。

そうしたら先輩は「そういうことを言うもんじゃない。会つてみて気に入らなくて断わるのならいいよ。会いもしないうちから断るのは失礼だ」と言うのです。そんな事で、私は強制されて見合いをしたんです。相手は見合いに慣れていたようで、落ち着いていました（笑）。

その後で私は、「私の家に来てくれるのなら貰う」と返事をしたんです。そしたら、向うも同じことを言ったんですよ。「貰ってくれるなら行く」とね（笑）。縁なんてそんなもんですよ。そして私は、家庭事情がばれちゃいけないと思って、三月二十九日に結婚したんです（大笑）。会って四回目で結婚式をしたんです。あれからもう四十年が経ちました。私は、その女性が来てくれてよかったといつも思っています。こういう考え方を「結果幸福論」と言います。

そうなった結果が一番幸福だと考える。これが「観」なんです。「結果幸福論」なんて言葉は広辞苑を引いても出ていないですよ。私が作った言葉ですからね。こういう言葉を発明して、私は自らを慰めているのです（笑）

異に学ぶ

次は、「異に学ぶ」ということです。私たちは意見が違くと、とかく癪にさわる。こういうのを「異に学ばない」と言うんです。ですから、私は反対のことを言ってもらえたり、批判をされたりすると喜ぶんです。大体、同じ者同志じゃ伸びないんです。反対をされるから「そういう考え方もあるのか」とお互いに伸びていくのです。

そういう点では、私は大変家内に恵まれていまして絶えず勉強をさせられています。（笑）

「異に学ぶ」というのは学校の教員は特に気をつけなきゃいけません。教えてる相手は子どもですから、「異」がないのです。先生が「こうしろ」と言ったら「はいっ」と子どもは聞くわけです。だから先生の話がへたで、子どもが飽きてしまってよそ見をすると、先生は「よそ見しているんじゃない！」と自分を反省しないで子どもを叱ります。

「先生の話は分からない」と実は子どもは言っているんです。「もう少し短く、分かりやすく話してください」と親から言われると、「この頃の親はうるさい」というように思ってしまう。そういうのは「異に学ばない」ということです。私は今まで「異に学ぶ」ということに努めてきましたので今日があるのだ、と思っています。

教員というのは、小学校を卒業して中学に行って、中学を卒業して高校に行って、高校を卒業して大学に行って、また小学校に戻ります。

だから、学校以外の世界は知らないんです。「異に学ぶ」というのは広く様々な人に出会って学ぶということなのです。

私は、「異に学ぶ」のが好きです。「変わってるな」と思うと近づきたくなります。私は、十年ほど房総の職人さんと話をするために千葉県中を廻りました。唐傘屋さんとか、下駄屋さんとか、ね。今、この方から話を聞いておかないと、その世界の話はもう聞けなくなる、という危機感から、十年間ずっと話を聞きながらある新聞に連載をさせてもらいました。だいたい職人の方々の学歴は小学校卒です。そこから私は、随分いろいろなことを教わりました。

ある和菓子屋さんに行ったとき、論語の言葉を引いて「衣食足りて礼節を知る」という話を聞きました。「着る物や食べる物がなければとても礼節なんてゆとりは生まれてこない」。だから、まずは衣食を調える。そうすれば礼儀も作法も人は自ずと身に付けていけるものだ、ということでした。

その和菓子屋さんは、論語のこの言葉は違うのではないかと、言うのです。「今じゃ、衣食足りて礼節は乱れちゃってますよね」と言われました。そうですね、着る物も、食べる物も、今の日本では余ってるでしょう。そして、礼節は地に落ちました。その和菓子職人さんは「礼節を知れば衣食足る。これが本当ですね」と言われました。私はね、この言葉を聞いて本当にジーンとしましたね。

その和菓子屋さんは丁稚奉公から始めて独立したときに、とにかくお客さんに喜んでもらう和菓子を作ろうと誓いました。心を込めて手作りをするから、ある量しか作れない。だから昼前で売り切れになっちゃうんです。そこで、「本日は売り切れました。お許してください。またのご来店をお待ちしております」という看板を丁寧に作って出したんです。そうするとその看板がまた評判になって、お客がどんどん増えました。「ここの饅頭はうまい」って評判が立って、「私たち家族が食べて暮らしていけるぐらいのお金はお客さんが充分もってきてくださいました」と、とってもいい話を聞かせてくださったんです。こういう話題は学校の先生と話していても出てこないですよ。和菓子屋さんを訪ねなきゃ出てこない話です。

「異に学ぶ」自分の世界とは異質なところから学ぼうということ、こ

れは非常に大事なことです。とかく学校の教師は狭い環境にいます。だからこそ、広く視野を開いているいろいろな所から学ぶ努力が大切なのです。

ついでながら、「賢人から学ぶ愚者は少なく、愚者から学ぶ賢人は多い」という格言について紹介しておきましょう。この言葉は私が若かりし頃、先ほど言いました読書家の内科医の先生から教えていただきました。これはドイツの詩人・思想家ゲーテの言葉です。

「賢い人から学ぶ愚かな人は滅多にいない。賢い人は愚かな人からも学ぶものだ」ということです。それは、「学ぶか学ばないかで賢愚が決まる」ということです。「異に学ぶ」ということ、自分とは違う立場から何を学べるかということが分かれ目です。自分自身が腹立たしく思ったときこそが伸びるチャンスなんです。そういう点からも、私は大変家内に恵まれて、今日こうしていただけるのです（笑）。

仲間を選ぶ

次が「仲間を選ぶ」ということです。「類は友を呼ぶ」と申します。盛り場などで集まっている若者は、みんな同じような格好をしていますね。やっぱり集まっているのを見れば、どのような集団かが大体分かるのです。

「仲間」というのは本当に大切です。しかし、学校の仲間でも、ゴルフが好きだというそういう仲間はすぐ集まる。そういう人は教師でなくゴルファーになったら良かったんですよね。麻雀仲間なんのもありますね。私はそういうのは出来ませんので、もっぱら仲間と教師としての勉強をしています。これが私の一番の楽しみです。

だから、今でも全国を廻って一級の先生方との出会いを楽しんでいるのです。これほど嬉しいことはありません。私が行くのはほとんど休日です。参加してくださる方は、自分の時間を使い、参加費を払い、そういう勉強会に来てくださるのです。そういう先生というのは一級の先生方です。私は全国各地の一級の先生方としょっちゅう出会い、日本の教育について話し合っています。これはとっても楽しいことです。終わると必ずいっぱいやります。みんなそういうのを楽しみにして来てくださいます。

私は七十歳ですが、同級生が集まると「若い」と言われます。家内も「あなたは確かに若い」と言いますね。そして、「若い秘訣は各地の若い先生方のエネルギーと情熱をいつも吸収しているからだ」と、申します。家内にはなかなか洒落たことを言ってくれます（笑）。が、実は私もそう思っています。

どのような仲間と出会い、どのような仲間と付き合っていくか、で教員の人生は大きく変わります。明日は私のところに十人ばかりの先生方が集まります。もう二十五年にもなるのですが、月に一回そういう勉強会を私の家を会場にして開いています。抜けていった人もいますし、入ってくる人もいます。それが「民間サークル」というものの特質です。この勉強会をずっと続けて、他のいろいろなサークルにも私自身が出向き、今もすばらしい仲間と学び合っております。

憧れ

もう一つ、それは「憧れ」です。「憧れ」を持つことはとても大切です。そこに近づいて行きたくなるからです。大学の先生方が自分の師匠を持っている、ということは、つまり「憧れ」を持っているということなのです。あの先生のようにになりたい、と思うから励んで近づいていくのです。

何に憧れるのでしょうか。ああいう先生になってみたい、あのような母親になってみたいと思う、その憧れが大切なのです。「憧れ」というのは自分の理想像に近いものだと思います。それが無い人は自分がトップで頂点ですから、もっと高まっていこうという向上は難しいですね。「憧れ」という字を見てください、りっしんべんに童（わらべ）と書きます。子どもの心はいつでも憧れを持っているのです。

私の孫はウルトラマンに一時憧れていました。パジャマまでウルトラマンのを着てましたね。女房はいつも蹴っ飛ばされる役でしたよ。子どもはパジャマを着るだけで自分はウルトラマンになっちゃいます。いいですねえ、これが、子どもの憧れですよ。女房がたまに「今度は、婆ちゃんがウルトラマンになる」と言うと、絶対にそのポストは譲らないんですよ（笑）。

「憧れ」を持つ人は自分より高いものに憧れ、それに少しでも近づ

こうとするから「進みつつある教師」であり続けるのです。研究も大事だけれど、「修養」はもっと大事です。「信・敬・募」の具現のためには「修養」が非常に大事になってくるのです。

そして、その「修養」のヒントとしては、「本を読むこと、学ぶ心をもつこと、観を磨くこと、異に学ぶこと、仲間を選ぶこと、憧れを持つこと」が考えられます。このような私の話を聞いて、信じる人と信じない人がいるでしょう。それはそれでいいんです。「疑問を持つ」ということはとても大事なことですからね。

実は、この五つのそれぞれの頭は「^{ほん}本・^ま学・^か観・^い異・^な仲・^あ憧」(ほん・ま・か・い・な・あ)と、こういうことになります。「本当だな」と思う方があったら、どうぞ学んでください(笑)。

ご清聴いただきまして、誠に有難うございました。(拍手)